

学校法人 佐藤栄学園

令和 7 年度 栄東中学校入学試験問題

A日程(1月10日) 〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
------------	--

氏 名	
-----	--

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、**問題用紙**と**解答用紙**のどちらにも**受験番号**と**氏名**を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で21 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、**問題用紙**と**解答用紙**は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。
8. 字数指定のある問題は「、」や「。」も1字として数えるものとします。

一

次の各文の――線部を漢字に直しなさい。ただし、解答欄の大きさに合わせて、大きくていいいな字で書きなさい。

- 1 北陸は日本有数のコクソウ地帯だ。
- 2 試合を前に自分をハッペンさせる。
- 3 昨年はヒキこもごもの一年となった。
- 4 力士の美しいシヨサが注目を浴びる。
- 5 彼女の話はリロセイゼンとしている。

【二】 次の（ 1 ）（ 10 ）に当てはめるのに最も適切な言葉をあとの【語群】から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ・芥川龍之介^{あぐたがりゅうのすけ}の作品に（ 1 ）する。
- ・いよいよ返済期限^{はいさいきげん}が（ 2 ）する。
- ・国民としての恩恵^{おんけい}を（ 3 ）する。
- ・もうすぐ講演^{こうげん}に父が（ 4 ）する。
- ・紙面の都合上^{しやうさうじ}詳細は（ 5 ）する。
- ・新婦^{しんぷ}がお色直し^{おいろ直し}で（ 6 ）する。
- ・文書に新たな情報^{しほう}を（ 7 ）する。
- ・それぞれの思いが（ 8 ）する。
- ・足りない分は貯金^{ちきん}で（ 9 ）する。
- ・この成分は植物^{しょくぶつ}に（ 10 ）する。

【語群】

ア	切迫 ^{せつぱく}	イ	中座 ^{ちゅうざ}	ウ	由来 ^{ゆらい}	エ	割愛 ^{かつあい}	オ	登壇 ^{とうだん}
カ	充当 ^{じゆうたう}	キ	傾倒 ^{けいとう}	ク	加筆 ^{かひつ}	ケ	享受 ^{きやうじゆ}	コ	交錯 ^{こうさく}

〔三〕 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

どの学校にも、別にはつきりと校則には書いてないし、誰かがそう言っているわけでもないけれど、なんとなくみんなが守っているルールがありますよね。

私の高校では、制服と通学カバンが指定されていました。ただ、サッカー部やバスケットなどに所属している、いわゆる「イケてる」生徒は、それを着崩すことが許容されていました。いや、もちろん、先生が見逃してくれる範囲のことです。たとえば、ワイシャツをズボンから出してみたり、靴の踵を踏みつぶしてみたり、通学カバンをエナメルバッグに変えてみたり、といったことです。今思えば、そののいったい何がよかったのかわかりませんが、とにかく、それが私たちにはめっちゃカッコよく見えていました。

ところが、前述の通り、このように制服を着崩すことが許されていたのは、「イケてる」生徒だけです。そして、何をもって「イケてる」かと言えば、サッカー部やバスケットなど、アクティブな部活動に属していることです。でも、何をもってアクティブかは曖昧でした。たとえば野球部や卓球部も大変アクティブですが、そうした部活に属する生徒には、制服を着崩すことはなんとなく許されていませんでした。

さて、私は演劇部に属していました。当然ですが、演劇部の生徒に制服を着崩すことが許されるはずがありません。演劇部は——少なくとも私の高校では——「イケてない」からです。だから、私以外の部員はみんなしつかりと制服を着ていました。しかし私は、自分を「イケてる」と思い込んでいたので、その不文律に抗って、制服を思いっきり着崩していました。ヘアワックスで髪を遊ばせ、ワイシャツをズボンから出し、靴の踵を踏み、演劇の台本を入れるためにスポーツ用のエナメルバッグを持ち歩きました。

言うまでもなく、私は教室で目を付けられることになりました。「調子に乗っているやつリスト」に入れられ、「イケてる」生徒によって構成される共同体には、参入することが許されませんでした。幸いなことに、私の高校にはいじめがなかったもので、特に辛い思いはしなかったのですが、「戸谷君って珍しいよね」という理由から、「珍太郎」というあだ名をつけられ、「珍さん」と呼ばれて三年間を過ごしました。そのあとの人生で、そんなふうに空気を読めないことでいろいろと苦労しましたので、今となっては後悔し

ています。

なんで、あのとき私は、わざわざ制服を着崩していたのでしょうか。いま思い返すと、たぶん私は、そこにある空気を破りたかったのではないか、という気がします。つまり、この人は制服を着崩して良くて、この人はいけないという、あんもく りようかい暗黙の了解に従いたくなくなつたのです。

私たちは、日常生活において、多かれ少なかれ、空気を読んで生きています。それに対して、空気を読めない人は、それだけで――² つまみ者として扱あつかわれてしまいます。空気を読まないことは、たとえ誰も傷つけていなくても、空気を読んでいないというただその理由だけで、まるで悪いことをしているかのように扱われてしまうのです。

(中略)

そもそも私たちはなぜ空気を読んでしまうのでしょうか。周りに同調して行動しているとき、私たちには、自分がなぜそうした行動をしているのか、説明することができません。いや、それどころか、自分が空気を読んでいること自体に、気づかないことさえあるでしょう。ギャツビーのような、空気を読めない人間を目の当またりにして、はじめて自分が周りに同調して行動していたことに気づく――そうしたことがほとんどであるように思います。

つまり私たちは、空気を読もうとして、空気を読んでいるわけではありません。気がついたら空気を読んでいるのです。なんだか不思議な言い方になっていますが、おそらくそれが事実ではないでしょうか。

³ こうした現象に対して、極めて鋭い分析を展開した人物がいます。二〇世紀ドイツの哲学者、マルティン・ハイデガーです。

彼は、人間の存在のあり方を二つの種類に区別しています。一つは「ほんらいせい本来性」で、もう一つは「ひほんらいせい非本来性」です。本来性は、人間が自分自身の可能性に従って、自分を理解している状態であり、非本来性は、自分自身ではない可能性に従って、自分を理解している状態です。要するに、自分らしく生きている状態が本来性で、そうではない状態が非本来性、と考えてもらえれば、大丈夫です。それでは、私たちは普段、ふだんどちらの状態で生きているのでしょうか。当然、それは本来性である、と言いたくなります。ところが

ハイデガーは、日常生活において人間は常に非本来性の状態にある、と言うのです。つまり人間は、基本的にはいつも、自分自身を見失い、自分らしくない形で生きているのです。

それでは、非本来性とは、具体的にどのような状態でしょうか。ハイデガーによれば、人間は日常において、誰でもない誰かとして、匿名的な「みんな」の一員として存在しています。彼はそうした「みんな」を「世間」と呼んでいます。世間とは、特定の誰かではありません。世間で「こうだ」と言われていることを、誰が言い出し、誰がそれを認めたのかは、まったくわかりません。そうであるにもかかわらず、私たちは世間の一員として、世間のなかに取り込まれてしまっているのです。それは、本書の言葉で言い表すなら、空気を読んでいる状態、同調圧力に支配されている状態に他なりません。

たとえば、教室のなかで同調圧力に支配されているとき、私たちはほとんどの場合、その事実には気づきません。そのとき私たちは、かけがえのない個人としてではなく、教室のなかの「みんな」の一員、誰でもない誰かの一人として、存在しているのです。しかも、そうなることを望んだわけではありません。気がついたらそうなっているのです。

ハイデガーは、日常生活において、すべての人が、常に、非本来性の状態にあると指摘しています。この点で彼の主張は極めて徹底しています。空気を読んではしまうのは、意志が弱かったり、個性がなかったりする人の特徴ではありません。意志が強い人も、個性的な人も、日常においては必ず非本来的なのです。そして、そうである以上、空気を読むことはそれ自体が悪いことではありません。だってみんな X んですから。 Y 人間なんて存在しないんですから。

問題なのは、それでは、どうやったらその空気に従わないことができるのか、という点です。前述の通り、同調はしばしば私たちを暴力へと荷担させます。それを回避するためには、同調圧力に対して、何らかの形で脱出することができなければなりません。ハイデガーの概念で言うなら、非本来性の状態を脱却し、本来性を取り戻さなければなりません。しかし、それにはどうしたらよいのでしょうか。

非本来性に陥っているとき、「私」⁴は誰でもない誰かになっています。それは言い換えるなら、個性を失っているということ、別の誰かと交換できる存在になっている、ということなのです。なんだか切ない話ですが、当然そうなります。たとえば教室のなかで、「私」がみんなと同じように行動しているなら、そう行動するのが「私」でなければならぬ理由は特にありません。だから、非本

来性の状態のとき、「私」はいてもいなくてもいい存在なのです。

ア

日常生活において、人間が常に非本来性の状態にあるなら、人間はどんなときでも、いてもいなくてもいい存在である、ということになります。私たちの人生は、いつでも誰かと取り換えることができる、交換可能なものになってしまいます。ところが、ハイデガーによれば、このような考え方が成立しなくなってしまう、大問題があるのです。

それが、死です。

死!? と思われましたか。まあびつくりしますよね。ハイデガーを読む人は必ずそこで驚くので、自然な反応ですよ。

ハイデガーによると、死を他者と交換することはできません。なぜなら、考えてみれば当たり前のことですが、「私」の代わりに誰かに死んでもらうことはできないからです。

イ

たとえば、悪魔が「私」に呪いをかけたとしましょう。そして、「私」がその呪いを別の誰か（ここでは仮に珍太郎くんにししよう）に移したとしましょう。珍太郎くんが「私」に移された呪いのせいで死んだとしましょう（かわいそうな珍太郎くん）。このとき、珍太郎くんは「私」の代わりに死んだわけですが、しかしだからといって、「私」の死が帳消しになったわけではありません。呪いがあろうがなかろうが、「私」はいつか死ぬからです。そして、「私」の代わりに死んだ珍太郎くんにとって、その死は「私」の死ではなく、あくまでも珍太郎くん自身の「死」なのです。

したがって、ハイデガーが死という言葉で考えていることは、誰の人生にもいつか終わりが来ること、したがってそれは限られていること、そうした人生の有限性であると言えます。そうした有限性を意識すれば、私たちは自分の人生が、決して他者と交換できるものではない、ということに気づくことができるのです。

ウ

たとえば、何らかの難病にかかり、余命が一年だと宣告されたとしましょう。自分に残された時間を自覚した「私」は、今までのように空気を読んで、他の人と同じような生き方をするなどしないでしよう。きっと、世間から笑われたり、つまはじきにされたりしても、自分がやりたいこと、自分らしいと思えることをやるでしょう。

エ

とはいえ、人間はいつか死にます。余命が一年か十年か数十年かの違いでしかありません。誰もが気づいていないだけで、実際には余命宣告された人と同じ境遇にあるのです。そうであるとしたら、私たちは誰だって非本来性を抜け出すことができるはずで

この世界には、誰一人として、他者と交換可能な人間など存在しないのです。

(中略)

思い返してみると、「イケてない」生徒だったのにもかかわらず、制服を着崩し、それによって空気を乱し、珍太郎と呼ばれていたとき、私はなんだか快感を味わっていた気がします。その快感は、たぶん、自分が誰でもない誰かではなく、個性をもった存在であると実感したこと、生じたのではないかと思います。そう言うと、ちよつと痛いやつのようにも思えます。しかし、ハイデガーの哲学に従うなら、空気を読まないことができるということは、単なる世間の一員ではないということ、誰でもない誰かではないということの、何よりもの証に他ならないのです。

オ

おそらく、そこに空気を読まないことの楽しさがあります。確かにそれは、世間のなかで悪いことと見なされます。しかし、世間に同調している限り、私たちは自分自身を見失っているのです。それどころか、そうした同調は、場合によっては私たちを暴力へと荷担させることさえあります。そうであるとしたら、空気を読まない行動ができる方が、もしかしたら悪に染まらずに済む、なんていう事態だつて起こりえるかもしれません。たとえば教室でいじめが起こつているとき、空気を読まない生徒は、そのいじめに荷担することを拒否するかもしれません。しかし、それは決して悪いことではないようにも思えます。

(戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』より)

*ギヤツビー……アメリカの小説『グレート・ギヤツビー』の登場人物。

問一——線部1「その不文律」とありますが、その内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者が通っていた高校には指定の制服と通学カバンがあること。
- イ 高校生にとって制服を着崩すことがカッコよく見えていること。
- ウ 「イケてない」演劇部は制服を着崩すことが認められないこと。
- エ 野球部や卓球部がアクティブな部活動と見なされていないこと。
- オ 「イケてない」生徒が制服を着崩すことを先生は許さないこと。

問二——線部2「（ ）つまみ者」とありますが、（ ）に漢字一字を入れて慣用句を完成させなさい。

問三——線部3「こうした現象に対して、極めて鋭い分析を展開した人物」とありますが、この人物の「分析」として適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は日常生活において常に「非本来性」の状態にあるため、どんな人であつても知らず知らずの内に世間に同調しており、自分らしさを見失った状態で生きている。

イ 世間の一員となることは匿名性が極めて高い集団に所属するということであり、安易に人を攻撃しこうげきやすい状況になるため、人間は常に暴力の危険性にさらされている。

ウ 「本来性」とは人間が自分の可能性を信じていることができている楽観的な状態のことで、「非本来性」とは可能性を信じていることができない悲観的な状態のことである。

エ 同調圧力に支配された人間はなぜ自分が空気を読んでいるのかも説明できないほど思考力が落ちており、何が正しいのか判断することができない状況に置かれている。

オ 世間の意見や評判というものは、誰が言い出して誰が認めたのか全く分またからないものであるのに、人間は世間に取り込まれ、その意見や評判に流されてしまっている。

問四 本文中の

X

 ・

Y

 に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|-----------------|---------------|
| ア X…空気を読んでいない | Y…空気を読んでいる |
| イ X…空気を読んでいる | Y…空気を読んでいない |
| ウ X…意志や個性を持たない | Y…意志や個性を持っている |
| エ X…意志や個性を持っている | Y…意志や個性を持たない |
| オ X…自分を理解できている | Y…自分を理解できていない |
| カ X…自分を理解できていない | Y…自分を理解できている |

問五 —線部4「『私』は誰でもない誰かになっています」とありますが、これはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の個性が何か分からなくなってしまい、誰にも認めてもらえない不安の中で生きていかなければならないということ。
- イ 「みんな」の一員として認められている安心感によって、深く考えず自由気ままに行動を決めてしまっているということ。
- ウ 誰かがいなくなっても代わりとなる人がすぐ現れる現代において、「私」という存在は社会の歯車にすぎないということ。
- エ 特徴を一切もたない、たとえば他の誰かと入れかわったとしても周りに気づかれることのない存在になっているということ。
- オ 集団の一部として自分らしさをもたず他者と同じように生きているので、個人の存在意義を失った状態にあるということ。

問六 — 線部5「死を他者と交換することはできません」とありますが、これは何を意味していますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 呪いのような非科学的なものは存在しないということ。
- イ 他者のために生きることが決してできないということ。
- ウ 悪事を働いた人はいずれ必ず報いを受けるということ。
- エ 自分の死から逃れることは誰にもできないということ。
- オ すべての人に生まれてきた意味があるのだということ。

問七 — 線部6「私たちは誰だって非本来性を抜け出すことができる」とありますが、どうすることで「非本来性」を抜け出すことができるのですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問八 次の文は本文中からぬき出したものです。どこへもどすのが適切ですか。本文中の ア イ ウ エ オ から一つ選び、記号で答えなさい。

このとき、人間は非本来性を脱却し、本来性を取り戻している、と考えることができます。

問九 — 線部7「空気を読まないことの楽しさ」とありますが、なぜ「空気を読まないこと」は楽しいのですか。その理由を「空気を読まないこと」に続けて、二十字以上三十字以内で答えなさい。

問十 次に示すのは、本文を読んだ生徒たちの会話です。本文の内容を踏まえたものとして適切ではないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 空気を読まないことは筆者が言うように、世間のなかで悪いこととして見なされがちだね。だからみんなと違うって結構こわいことで、たとえばクラスで話し合いがあつたとき、みんなの意見と違うことはなかなか言い出しにくいよ。「空気読めないな」って言われて、嫌われないか心配になるから。でも、違う意見を言うことは別に誰かを傷つけようとしているわけじゃないし、悪いことじゃないよね。

イ みんなの意見と同じって、安心できるよね。でも考えてみると不思議じゃない？ そのみんなの意見って誰が言い出して、誰が支持したんだろう。話し合いのときだって、全員が発言したうえでみんな一緒だと確認したわけじゃないよね。それに、なんとなくみんなと守っているルールがあるけど、なんで守らないといけないのかは説明できない……。そんな意見とかルールに流されるのって、実は結構こわいことのように思うな。

ウ むしろ空気を読むことのほうが悪いことなんじゃないかな。他人の顔色ばかりうかがって、周囲に合わせようとかばかりしていると自分の主張をすることができないんだから。筆者の高校生のときの話でも、空気を読んでいた人の方がルールを守って窮屈な思いをしていたわけだし。空気を読むもうとすることをやめたらもっと自由に自分らしく過ごせるし、同調圧力によって暴力に荷担させられることもなくなるよね。

エ みんなが持っているから同じものを欲しいとか、みんなが言っていることだから正しいとか、そう言っているときは自分でしっかり物事を考えているわけじゃないよね。同じことが本文で例に挙げられたいじめでも言えると思うよ。みんなが言っているからっていうのはある意味で無責任だよ。みんなの意見が悪い方向に向かっていると感じたときには、周りの目を気にせず自分の主張ができるようになると思うな。

オ 自分が空気を読んでいるという自覚がないときも多いから、難しい話だけどね。少なくとも空気を読まないことが悪いこととは限らないという認識は持っていたいなと思うよ。たとえば「空気を読めない」と言われている人がいたときに、この人は自分らしく生きているんだと思うだけで見方は変わってくるし、自分が「空気を読めない」と言われたときも周囲の評価を気にしないでいられるようになるんじゃないかな。

四 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

大丈夫。全然平気。べつに、つらくなんてない。

繰り返しそう唱えても、心は麻縄で縛り上げられたみたいに悲鳴をあげている。さびしい、しんどい、苦しい。その叫びを認めてしまつたら、きつともう立ち上がれない。

小学校の校舎の隅にある北階段は、わたしの唯一の居場所だ。

普段めつたに使われないせいで、毎日掃除をしているのに埃っぽい。節電のためといって、電気は消されている。底冷えする二月の空気で指先がかじかんでいく。踊り場の窓から差し込む真昼の光だけが、手元の本のページを照らして文字を浮かび上がらせる。ほんの少しも、いいところじゃない。だけど、ここでしかわたしは息ができない。

ふと人の気配がして顔を上げると、階段の下から同じクラスの女の子たちがくすくす笑ってこつちを見ていた。わたしと目が合った瞬間、くすくす笑いが一段と大きく膨れ上がって、弾かれたようにその場から駆け出す。聞こえやがしな笑い声が、階段に反響しながら遠ざかっていく。

ここもだめだ。

本を閉じる。次の休み時間もきつと、クラスメイトがひとりぼっちのわたしを冷やかにやって来るだろう。また新しい居場所を探すしかない。べつにいいんだ、二月の北階段は寒かった。もう少し暖かくて、もう少しいい場所がきつとある。

学校には大勢の子どもがいるけど、そのなかでも真正銘のひとりぼっちは数少ない。本当の仲良しがいる子、孤立を防ぐための同盟みたいなものを結んでいる子。みんな、そうやって仲間を作って、クラスや学年という社会を上手に渡り歩いている。わたしも少し前までそうだったけど、気が付けば仲間がいなくなっていた。

なにか悪いことをしたとか、失言したとかいう心当たりはなかった。たぶん、ただ単にそういう順番が回ってきてしまったんだと思う。学校に行きたくないダメモトでお母さんに言ってみても、たいして話を聞きもせず、その程度で、と却下されてしまった。先生は、わたしが困っていることになんて気付いてくれない。

暖房^{だんぽう}の効いた図書室に入って、カウンターで本の返却^{へんきやく}手続きをする。当番の図書委員は、卒業を間近^{ひか}に控えた六年生だ。あと一カ
月で小学校とおさらばできる。そのことが、とてつもなくうらやましい。

次に借りる本を探して、返却本コーナーに目を向ける。

そこで、あるタイトルに視線が釘付け^{くぎづけ}になった。

『鍵開け師ユメと旅のはじまり』

ユメ。わたしと同じ名前だ。

吸い寄せられるように手に取った本は、全体的にシックな赤色の表紙だ。弓矢を持った女の子が心配そうな顔でこちらに向かって
扉を開ける姿が描かれて^{えが}いる。

この子がユメだ。

本を開くと、カバーを折り返した部分にあらすじが書いてある。落ちこぼれの出来損^{できそん}ない、だけど伝説の鍵開け師の孫娘^{まごむすめ}であるユ
メが、王国と魔法女王^{まほう}を救うため、仲間とともに敵国の手先と戦いながら王都を目指す。そんな物語であるらしい。

心を縛り上げる麻縄が、ほんのちよつとだけ、ゆるむ。

世界が少し、明るく暖かくなる。

³これはきつと、わたしのための物語だ。

(中略)

ドアを開けると、知らない家のおいがした。

都心から電車を乗り継いで一時間と少し。最寄り駅^{もよ}からは、バスに乗り換えて十分ほど。都内とは思えない、のどかで静かな町は

ずれに建つアパートは外壁がひび割れてかなり古く見えただけ、部屋も年季が入っていて薄暗かった。ドアは錆びているし、壁紙はところどころはがれている。玄関はすいぶん狭くて、お母さんが靴を脱ぐあいだ、わたしは雨が吹き込むアパートの廊下で待つしかなかった。

首を伸ばしてなかをのぞいてみる。たたきにはくたびれたサンダルが一足だけ置いてあった。玄関のすぐ横には古い洗濯機があった、その向こうのドアの先はたぶんユニットバス。ちらつと見えたキッチンには、シンクに洗い物がたまつてすさんだ感じに散らかっている。

「まったく、どうしようもない生活をしてたのね」

使いつばなしのキッチンを横目に見て、お母さんがうんざりした調子で言った。

「埃っぽいし、湿っぽいし。姉さんのことだから、空気の入替えなんてろくにしていなかったのね。まずは換気をしなくちゃ」

おじやましますも言わずに、お母さんは部屋に上がった。わたしも、おそろおそろそれに続く。埃で曇ったフローリングに足をくくと、ぎい、と軋んだ音が鳴った。

二週間前に、おばさんが死んだ。*1 原付の事故でのことだ。

お母さんのふたつ上にお姉さんがいたことを、わたしは A を聞いてはじめて知った。

お母さんは歳が離れたおじさんと二人兄妹と思っていたから、そのあいだにおばさんがいると聞かされたときは驚いた。お母さんの結美という名前と一文字違いの、泉美おばさん。彼女の名前すら、わたしは十四歳の今まで一度も聞いたことがなかった。

会ったこともなかったおばさんなんて、おもしろそうだ。あれこれ話を聞き出したいと思ったけど、どうもお母さんはおばさんのことが嫌いらしい。おばあちゃんも、おじさんも同じだ。みんなにさりげなく質問を繰り返していたら「子どもは知らなくていいの」と言われてしまったから、たぶんあんまりおばさんのことを話したくないのだ。そのくせ、中学生の貴重な週末に問答無用で遺品整理の手伝いをさせるんだから、ちよつとフェアじゃない。

「結芽」

北向きの部屋で窓を開けながらお母さんが呼んだ。わたしは狭いキッチンから、すりガラスをはめた引き戸で隔てられた部屋に足

を踏み入れた。

「うわあ」

六畳のわたしの部屋よりも狭い空間は、数えきれないほどの本であふれていた。部屋の規模には不釣り合いなほど立派で背の高い壁一面の本棚に、おびただしい量の本が並んでいる。収まりきらない本はローテーブルや床に積み上げられていて、本のジャングルみたいだ。

「こっちの部屋は、結芽が整理した方がいいかもね。なにかほしいものがあれば、持って帰っていいし」
「本当？」

「どうせ全部捨てるものだからね。——まったく、これだけ本を買うお金があるなら、もう少しマシな暮らしをすればいいのに」
呆れた様子で、お母さんはキッチンに向かった。「なんで休みの日をこんなことに使わなくちゃいけないのよ」とぼやく声が、乱暴にごみ袋を開ける大きな音と一緒にいらいと聞こえてくる。

わたしは、そつとおばさんの本棚に近付いた。草木の気配を感じさせる梅雨の湿った風が吹き込んで、埃っぽいおいを巻き上げる。そのなかには本のおいもたしかにあって、わたしは一気におばさんに親近感を抱いた。

本棚に入っているのは、最近話題になった文芸書から、漫画、児童書、文豪の全集、画集、図鑑と、多種多様だ。どれも大切に扱われていて、だけどコレクションではなく読むために集められたものだと感じた。

中でも一番大切に扱われているとわかるのが、ちょうど目の高さにある、有名な児童文学『リラの冒険』の愛蔵版だ。ほかの本は窮屈そうに詰め込まれているのに、そこだけ本を守るようなゆとりがある。

『リラの冒険』の愛蔵版は箱入りで、小口が金色の箔で飾られた、夢のように豪華な装丁だ。特典として挿絵や、作中世界の地図も入っている。十年くらい前に数量限定で販売されたものだ。今はオークションサイトやフリマアプリなどでプレミア価格で取引されている。誕生日にほしいとお母さんにねだったら、たかが本なのに高すぎると却下された。手に取ってみると、通常版よりもずっしりとした重みがある。装丁も、ネットで見ると素敵だ。これは絶対にもらって帰ろう。

おばさんの本棚にはほしい本が何冊もあった。だけど持ち帰れるものは限られているから、ほとんどは処分することになるだろ

う。貴重な本を見落とさないようにじっくり確認かくにんしていると、古本屋とか、それこそフリマアプリとかでいい値が付きそうなものがいくつもあった。絶版になっている本や、人気作の限定カバー本もたくさんある。このコレクションをそのまま捨ててしまうのはもったいない。

めばしい本をピックアップし終えて、本棚からデスクに視線を移す。わたしの部屋にある学習机よりも小さなデスクの上には、ノートパソコンと卓上たくじょうカレンダーが置いてあった。足元には、ノートパソコンの空き箱が無造作に転がっている。

それらを見て、意外に思った。おばさんは近くのドラッグストアでパートをして暮らしていたそう。アパートの立地や雰囲気ふんいきからしても、裕福ゆうふくだったとは思えない。今はスマホがあれば事足りる時代だし、ノートパソコンは贅沢ぜいたく品ひんだろう。もしかして、ライターライターの副業とかをやっていたのだろうか。

カレンダーを確認してみる。日付はまだ五月のままだ。おばさんは、五月二十七日に亡なくなった。

「……え？」

シフトの予定が書きこまれたカレンダーの、三十一日のマスを見て、思わず声が漏もれた。ハツとして、キッチンを片付けるお母さんお母さんを盗み見る。お母さんは黙々とキッチン用品や冷蔵庫の中身をごみ袋に投げ込んでいて、わたしの声は聞こえなかったみたいだ。深呼吸して、心を落ち着けて、もう一度カレンダーの五月三十一日の予定を確認する。

鍵ユメ改稿かいこうメ切きり

まさか、と思いながら屈かがむと、デスクチェアの向こうにも本が積まれていることに気付いた。そこにあるのはイズミ・リラ作『鍵開け師ユメ』シリーズの既刊分、全四巻。わたしの人生で一番の B 書。うちにあるものとまったく同じだ。だけど、すべての巻が複数冊ある。

まさか、と思って手が震ふるえた。ちよつと申し訳ない気はするけど、デスクのひきだしを開けて中を漁あさる。そこには筆記用具のほか、メッセーじが書かれた一筆箋*2 いっぴつせんが何枚か入っている。差出人はどれも「倉森」*3 くらもりとあった。

そして宛名^{あてな}は、

「……イズミ・リラ様」

声に出した瞬間、パズルのピース⁷がはまるみたいに情報^{つな}が繋がった。だけどその答えを信じられなくて、まさかね、と別のひきだしに手を伸ばす。

一番大きなひきだしにはきれいなお菓子^{かし}の箱が入っていた。蓋^{ふた}を開けると、かわいい封筒^{ふうとう}の手紙が何通も折り重なっている。宛名や差出人の文字はどれも、少しいびつな子どもの字だ。

そのうちの一通に見覚えがあった。黄色の花模様、花びらに銀の箔押^{はくお}しがされた、豪華な封筒。宛先^{あてさき}は、風月書房編集部イズミ・リラ先生係。

差出人の名前は、本村結芽^{もとむら}。

まちがいない。小学五年生のわたしが、イズミ・リラに宛^あてて出したファンレターだ。心臓がばくと鳴る。

X

(実石沙枝子^{じついしさえこ}『物語を継ぐ者は』より)

* 1 原付……原動機付自転車。バイクの一種。

* 2 一筆箋……短い文章を書き送るための小型の便箋。

* 3 倉森……出版社の社員。

問一——線部1「同じクラスの女の子たちがぐすくす笑ってこっちを見ていた」とありますが、このときの笑いとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 微笑^{びしょう} イ 談笑 ウ 冷笑 エ 苦笑 オ 一笑 カ 失笑

問二——線部2「そういう順番」とは何の順番ですか。解答欄^{うた}に合うように、自分で考えて四字で答えなさい。

問三——線部3「これはきつと、わたしのための物語だ」と思ったのは、『鍵開け師ユメと旅のはじまり』の主人公と「わたし」の名前が同じだということの他に、どのような理由が考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 出来損ないの「ユメ」が敵国の手先と戦うというストーリーが、つらい現状を打開したいと願う自分と重なり、勇気を与えてもらえる気がしたから。

イ 王国を救うために仲間とともに行動する「ユメ」の姿を見て、友達と仲良くしていた頃の自分が懐かしく思い出され、世界が暖かく感じられたから。

ウ 「ユメ」の武器である弓矢が、自分の心を縛っている縄を射ぬいてくれたので、暗闇^{くらやみ}に包まれた絶望的な世界が少しだけ明るくなったと思えたから。

エ 本の表紙に描かれた、こちらに向かって扉を開ける「ユメ」の心配そうな顔が、毎日びくびくしながら過ごしている自分の顔とそっくりだったから。

オ 「ユメ」が落ちこぼれであることに不安を感じながらも、伝説の鍵開け師の孫娘だと知って、閉ざした自分の心の鍵を外し、てくれると期待したから。

問四 — 線部4「おじやましますも言わずに、お母さんは部屋に上がった」とありますが、この表現からどのようなことがわかりますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 他人に厳しく自分に優しい「お母さん」が、普段からあまり他人に対してあいさつをしない人だということがわかる。
イ 「おばさん」の部屋がとても汚れていて、あいさつも言えないくらい「お母さん」が驚いているということがわかる。
ウ 「おばさん」の死因に疑いを持っている「お母さん」が、部屋に誰か^{だれ}がいるかもしれないと用心していることがわかる。
エ 「お母さん」が実の姉である「おばさん」を心配して、他の人には内緒^{ひそか}でこの家を何度か訪れていたことがわかる。
オ 「おばさん」をよく思っていなかった「お母さん」が、いやいや「おばさん」の家を訪れているということがわかる。

問五 本文中の A に入れるのに最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 速報 イ 急報 ウ 一報 エ 既報^{きほう} オ 虚報^{きょほう} カ 訃報^{ふほう}

問六 — 線部5「これだけ本を買うお金があるなら、もう少しマシな暮らしをすればいいのに」という言葉からは、「お母さん」の本に対しての価値観が読み取れます。これと同じように「お母さん」の本に対する価値観が読み取れる一文を、これよりあとの本文中から探し、初めの五字をぬき出して答えなさい。

問七 — 線部6「わたしは一気におばさんに親近感を抱いた」とありますが、それはどうしてですか。四十字以上五十字以内で答えなさい。

問八 本文中の B に入れるのに最も適切な漢字、二字の言葉を、自分で考えて答えなさい。

問九 線部7 「パズルのピースがはまるみたいに情報が繋がった」とありますが、このときの「情報」にあたるものを、次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 家族が亡くなった「おばさん」のことを話したがらないこと。

イ 『リラの大冒険』の愛蔵版が一番大切に扱われていたこと。

ウ 生活ぶりには不釣り合いなノートパソコンを購入していたこと。

エ カレンダーに「鍵ユメ改稿メ切」と書き込まれていたこと。

オ 「鍵開け師ユメ」シリーズが「わたし」の大のお気に入りだったこと。

カ 何通ものイズミ・リラ宛てのファンレターが出てきたこと。

問十 本文中の X には、この場面で主人公が確信した結論が入ります。本文をよく読んで、X に入る一文を二十字以内で答えなさい。



ここにシールをはってください

受験番号

整理番号

氏名

解
答
用
紙

(50分)

令和七年度

栄東中学校入学試験問題

國語

A日程（1月10日）

→	
4	1
5	2
	3

二	
6	1
7	2
8	3
9	4
10	5

三				
問十	問九	問八	問七	問一
				問二
				問三
20			30	
				問四
				問五
				問六

四					
問十	問八	問七		問六	問一
	問九				問二
					にされる順番
					問三
					問四
					問五